

事例の比較考察を通して、母村の伝統文化の継承と北海道農村の社会的性格を把握することを課題とする。

鈴木栄太郎は北海道には「農民の村落はないのが原則」という見解を披瀝したが、その村落とは自然村の理念型で把握される村落と解される。自然村の具体的な標識として氏子圏を指摘し、新しく村が発生する場合、独立の氏神を持つことがその資格を自他共に認めることと述べられるが、村落の形成過程や風土条件が府県と異なる北海道の開拓村落では氏子集団や祭祀組織はどのように形成され、村落の社会的統一とかがわり合うのだろうか。この問題を考察することは府県の伝統的農村（自然村）に対比して、北海道の開拓農村（開拓村）の特質と社会的性格を把握するために、一つの有効な研究視点と考えられる。

全道的な実態は不明であるが、個別入植村落では、氏神神社が存在しない部落も多いが、団体入植村落では母村ないし出身県の著名神社から祭神を勧請し、氏神（鎮守）神社を創建し、母村の祭祀を彦容しながらも継承した事例が多い。しかし、氏神神社の所在では府県の村落に類似しても、氏子圏や村落祭祀の存在形態は入植過程や村落の形成・展開過程、神社合祀政策などにより地域や部落ごとに相違が見られ、「氏子たる事が則ち村民たる事と同意義」と概括することはできない。母村と移住村の祭祀組織の比較考察を通して、北海道農村の社会的性格の把握に接近できると考えられる。

二、調査地の概況

愛知団体と通称される中央第一部落は稲作の北限地帯として知られる天塩郡遠別町の市街地より南へ約一〇km離れて位置する稲作農村である。現住戸数は二六戸で、非農家（小学校教員）四戸以外

一、開拓村落における村落祭祀と母村の文化的背景 —北海道遠別町中央第一部落の祭祀の比較考察—

一、研究の視点と課題

鷹田 和喜三

この報告は「母村と移住村の比較研究」の視点から、北海道の開拓村落における村落祭祀と氏子集団を入植過程、村落の形成過程と関連させて考察し、母村と移住村、団体入植村落と個別入植村落の

稲作農家（うち兼業二戸）で、平均経営規模は約六ヘクタールである。この部落は今日も母村から継承した村落祭祀を存続し、越前団体（共栄部落、二八戸）と個別入植部落（中央第二、六戸）に隣接している（これらの三部落により中央神社は昭和一〇年に合祀された）ため、母村および他県からの団体入植村落、個別入植村落の祭祀との比較考察が可能であり、開拓村落における神社合祀と氏子集団の再編の背景をさぐる糸口を提供すると考えられる。

この部落は明治三〇年に移住した。旧・愛知県愛知郡猪高村および近隣の東春日井郡の町村出身者を中心とする愛知団体一九戸により開拓された。団体入植者は村落形成の担い手となったが、帰村者や転出者も多く、現在、部落内に在住する団体の直系子孫は六戸のみである。しかし団体員の離農跡地には母村の血縁、地縁関係を頼って入植した移住者が多く、団体員の分家四戸をふくめ、愛知県出身戸数が一五戸を占める。

愛知団体は入植後より、念仏講、弘法大師祭、日待講、秋葉神社祭、虫祭などの母村の村落祭祀を継承し、後来の他県からの移住者もふくめて部落共同で祭祀してきたが、前記の三部落の神社の祭祀を合祀し、中央神社が創建され、氏子集団が再編された以降は、これらの祭祀行事は次第に、変容、消滅していった。合祀以前の愛知神社は熱田神社から祭神を勧請し、村落祭祀は母村の伝統を濃厚に継承し、愛知歌舞伎芝居も伝承されていた。他方、共栄部落には入植直後に結成された一三日講と呼ばれる講集団が存続し、福井県の真宗の伝統文化が継承されている。氏子神社の祭祀が三部落合同となり、氏子圏が中央地区に拡大された以後も、秋葉神社祭、弘法大師祭と一三日講が従来通りに部落独自の祭祀として存続してきた

背景には愛知団体と越前団体の母村の文化型の相違と、伝統文化を担った移住者の構成比率の相違が考えられる。その比率の高い中央第一では移住団体の祭祀が部落共同の祭祀に発展したが、離散者が多く、統一性に欠けた共栄部落では任意加入の報恩講と庚申講は形成されたが、部落共同の講集団とはなりえず、個別入植の中央第二では氏子集団以外の祭祀組織は形成されなかった。

三、母村の村落祭祀との比較

第一表は愛知団体の主要母村である旧・猪高村大字猪子石村（現・名古屋市中東区猪高町）の前山地区（現・町内会、戦前期はシマと呼ばれた）と移住村の中央第一部落の祭祀を比較したものである。前山は名古屋市への合併前後から急激に都市化し、転入者が激増したが、表記の村落祭祀は依然として、旧・前山シマの住民十五戸により存続されている。昭和三十年代以降に消滅したものをふくめ、多種多様な村落祭祀と講集団が存在したが、移住村に継承されたのは母村の村落生活に深く根ざしていたものや、開拓村落に適合した要因を持つものが、選択的に継承されたと考えられる。開拓村落の風土条件や生活条件が母村と異なるため、移住村祭祀の名称、期日、行事内容は変容していったと考えられる。変容の諸側面は母村の調査が不十分なため、継続調査をしたい。

第一表 母体と移住村の祭祀の比較

	猪子石村前山	中央第一部落
一月	正月日待（二〇）	△新年宴会
二月	△初午のお日待	
	△山の神講（七）	

部落内寺院な	宗派・檀家数	曹洞宗一	臨濟宗・?	曹洞宗・望	曹洞寺・三	
母村芸能	△愛知歌舞	な	し	し	△神楽	な
枝						し

注 △印は戦後消滅